



# 白 門 板 橋

1999. 3. 10 VOL.11

編集 中央大学学員会 東京板橋区支部

発行 〒175-0082 板橋区高島平2-23-3101 TEL 03-3975-3300



## ■「新春の集い」ご挨拶 大規模な支部会員の増強運動にご協力を

支部長 小日向 孝介



会員の皆様、明けましておめでとうございます。

ご案内のとおり日本経済は、依然低調で冬の時代から脱し切れない状況の中ありますが、昨年末政府は景気回復のため膨大な資金の投入を決定しましたので、今年の後半から回復の兆しが見えてくるのではないかと期待しております。特に、先般改造された第二次小淵内閣には、本学出身者が三人入閣しましたので、経済再生のため十分手腕を発揮していただけるものと信じます。(母校の近況の感想略)

ここで当板橋区支部の昨年を振り返ると共に、新年度の計画を若干申し述べてみたいと思います。

昨年は支部創立十周年記念事業を実行委員の並々ならぬご努力と会員各位の絶大なご協力で、不況の中にもありながらも盛大に実施することができました。お陰様で予定どおり大学本部への寄付金の贈呈に、記念誌の発刊も終え、収支決算もほぼ完了して、近く関係機関の承認を経て次回の幹事会にご報告申し上げたいと思います。会員各位の多大なご支援の賜と関係者一同深く感謝致しております。

従来有志による恒例の花見も年々盛況になり、本年度から支部行事として実施することになりました。この春は多数の参加をお待ちしております。またここ数年、支部会員の増強運動が小規模にとどまっております。会員数が減少傾向にありますため、本年度は大規模な運動を展開していきたいと思っております。会員各位の積極的な協力をお願い申し上げます。支部規約の見直しについての検討委員会の設置や、一部役員の新補充選任については常任幹事会に諮り、幹事会にご提案申し上げます。最後に会員の皆様のますますのご発展とご多幸とを祈念してご挨拶と致します。(1月22日・「新春の集い」にて)

支部ニュース

# 「新春の集い」六十六名が集う

恒例の支部行事「新春の集い」(新年会)が、去る一月二十一日(金)午後六時から区立文化会館和室で開かれました。

流行の風邪で欠席した方もありましたが、初めて出席した六名の仲間を含め総勢六十六名の会員が集い、盛やかな集いとなりました。冒頭、小日向支部長の挨拶をい



校歌を指揮する若手会員

ただき、われわれを取り巻く政治経済環境、母校のことに触れたあと、支部一年の事業を振り返り、創立記念事業を総員の協力でやりとげたことに謝意を表明され、本年度の事業計画の一端を述べられて、西崎常任幹事の音頭で乾杯。

例年通り新入会員と新規参加者の紹介を行なって歓談に入り、和やかに進行了しました。

途中、石塚顧問が駆けつけて親しく挨拶のマイクを持たれた頃には、みな顔面が紅潮し、饒舌になっていました。和室の会場には六つのテーブルが設けられ、どのテーブルにも熱気があがり宴たけなわになったところで、全員が立ち上がって肩車を組み、恒例となった「校歌」と「惜別の歌」を合唱し、最後は栗山相談役の音頭で三本締めの中締めとなりました。

別れを惜しんだ有志は、それぞれ小グループに別れて大山の街へ消えて行きました。

常任幹事会兼創立記念事業  
実行委員会開かれる

去る二月八日(月)午後六時から南常盤台二丁目の文化シャッター研修所を会場に、表記の会議が開かれ、創立記念事業の特別会計決算報告の他、観桜会、会員増強策及び規約改訂問題等の事業計画が審議されました。

## パソコン教室開設の予告

支部事務局の松島道昌幹事の厚意で、支部会員を対象に「パソコン基礎講座」を開設する運びになりました。初心者を対象にした基礎を楽しく勉強するもので、ご希望の方には朗報です。

◆開講時期 五月(連休明け)

◆場所 未定

◆講師 松島道昌氏

◆月謝 無料

詳細は追ってお知らせ致しますが、お問い合わせは松島道昌氏あてにお願致します。

(池田記)

☎三五五八一八八四〇

支部創立十周年記念誌

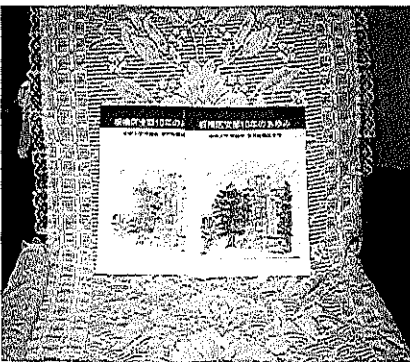
「板橋区支部十年の歩み」刊行

一年前の平成九年一月から編纂準備にかかった記念誌が、『白門板橋』編集委員会の手で、昨年十二月二十日に完成。会員をはじめ母校中大及び都内学員会支部など関係者に配布されました。

B5判全215頁で限定500部が印刷されましたが、読みやすさを配慮して写真が多く、手作りの味を感じさせるものができました。なお無償配布された他にご希望の方には、一部一〇〇〇円で頒布致します。

☎三九三〇一三四七(片桐)

申し込み先↓事務局まで



# 秋の伊豆に文学の旅

リポーター  
池田 亘利

板橋区支部では、恒例の秋の旅  
行を多くの文人にゆかりの深い天  
城・湯ヶ島く沼津のコースで、昨  
年十一月二十八、二十九日に行な  
った。

\*

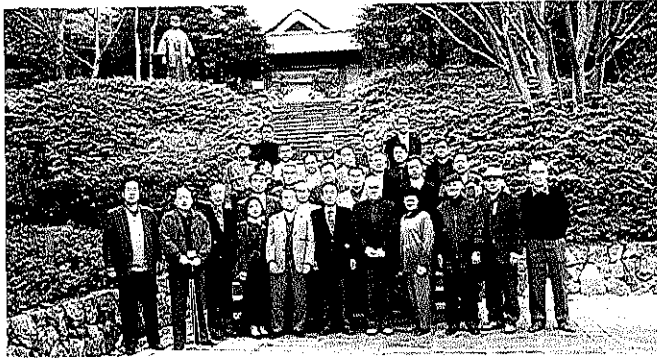
私鉄の事故で出鼻を挫かれた出  
発だったが、東名高速道路に入る  
なり、正面に富士山がクッキリと  
姿を見せ、我ら一行を出迎えてく  
れ機嫌を直す。一路伊東のホテル  
に向かい、まずは大漁鍋で昼食。  
潮風を嗅ぎながら海の幸に舌鼓を  
打ったものの、出発の遅れを取り  
戻すために、急ぎよ宇佐美から洋  
らんセンターを経て、湯ヶ島温泉  
の宿へチェック・イン。

宿は民宿風の旅館で見かけは質  
素だが、主人の本業が建築業だけ  
に、自ら建築した建物は、本格的  
な木造2階建てで、木の香りが残  
る立派なもの。露天風呂から眺め  
る湯ヶ島の山々には、まだ秋が残  
っていて川のせせらぎを背に暮れ  
行く景色を眺めながら、ぜいたく

な汗を流した。

宴会場は、大きな囲炉裏のある  
総板張りの民芸調広間を借り切っ  
て、風呂上りの紅潮した面々が浴  
衣姿で集合。

海の幸、山の幸あり。手作りの  
料理は格別に旨い。早朝に裏山で  
切った孟宗竹に地酒を入れ、囲炉



井上文学館を背に記念撮影

裏で爛をつけた「かつぼ酒」は、  
甘く香ばしい竹の香りがして美味  
だった。宴たけなわのところで中  
締めをしたものの、これまた囲炉  
裏の切つてある別室に、カラオケ  
を囲んだ二次会をスタート。全館  
借り切りで、何と延々四時間に及  
ぶカラオケ大会を繰り広げ、午前  
零時に解散した。

翌二十九日(日)もますますの  
天候に恵まれ、天城随一の名勝・  
浄蓮の滝を皮切りに、平山先輩の  
ガイドで「若山牧水記念館」と、  
「井上文学館」を見学。牧水の色  
紙に酒の飲み方を学び、井上文学  
館では、野田館長(芹沢文学館長  
兼務)の手厚い歓迎を受け、旅を  
こよなく愛した文豪の素顔を知る  
ことができた。小高い丘の上に清  
楚にたたずむ文学館で、久々に文  
学の香りを嗅いだわれら一行は、  
紅葉した銀杏並木のトンネルを抜  
けて一路帰途についた。

編集部・注

この原稿は、一月二十五日発  
行の『中央大学学員時報』に  
掲載されたものに、一部手を  
入れて再掲載したものです。

## 出島小結を死守

中尾は十両昇進決める。

初場所大相撲——  
中大出身力士の星取表  
●●○

▽出島(武蔵川)  
本名・出島武春 平8卒

東小結 八勝七敗

▽玉春日(片男波) 平6卒

本名・松本良一

西前頭一枚目 五勝十敗

▽中尾(松ヶ根)

本名・中尾浩規 平7卒

東幕下三枚目 六勝一敗

▽田中(友綱)

本名・田中康弘 平10卒

西幕下五千枚目 五勝一敗

◆中尾改め若枚 わかつとむ

本名・中尾浩規(ひろき)

十両昇進を機に、しこ名を改

めた。元学生横綱だった父親が

名づけた。

相撲道を一筋

に務めるとい

う願いを込め

たものとか。



たものとか。

# 長谷川文学立ち読み

「ある心の自叙伝」より  
法学院（中大の前身）学生気質を採る

我らが大先輩・長谷川如是閑の著作「ある心の自叙伝」は、いま絶版になっているが、法学院時代（一）の中に、明治時代の学生気質を読み取ることができる。

法学院の学生たちの年齢の凸凹には、もう変則的の中学の過程で馴れ切っていた私はちっとも驚かなかつたが、それらの人たちの勉強ぶりには敬服させられた。私学の故でもあったが、その人たちは、学問を学問として、いわゆるアカデミストをめがけて勉強しているものはほとんどないようで、また学校を出たら法律なんか抛ってしまつて、卒業をただ履歴書の金箔とするために学校を通り抜けるといった気持ちのものも、私の接した範囲では見当らなかつた。そうして、いずれも法律そのものを、

世に出た後の自分の足場にしようとする覚悟をもっている人たちのようにみえた。政治家、裁判官、弁護士、実業家、官吏、新聞記者といったような、はつきりした目標をもっているものが多く、純法学者とか法学教授とか、そんなものをうかがっている人は、私の知る範囲では一人もなかつた。私は先生のような親父のような同級生から、君は何になるつもりだと聞かれて、私は弁護士になると答えたが、それは父の意図で、自分は実は新聞記者になろうと考

で、いよいよ自分が頼りない気がした。しかも英法の一年には、すでに新聞記者として有名になつていた茅原廉太郎（崑山）が机を並べていたり、後に満鉄の理事になつた野々村金五郎が、新聞記者の経験をもっているとも聞いたので、弁護士から新聞記者に断然乗り換えようと腹を決めたのだったが、それをはつきりいう勇氣は、まだ自分がないのが情けなかつた。

以下略

■目標を持った先輩に敬服

われわれは、学生時代にどんな目標を持っていただろうか――？

法学部に入学した者は、誰もが一度は司法試験を受験したか、試験を目指したとも聞くが、大半の者は公務員になつたり民間企業へ就職しているはずだ。この大半の者と同じコースを辿るのが、経済や商学部を専攻した者だが、自分の目標（男子の本懐）とする職業を得たのだろうか。いやそれ以前に目標がなければ話は別だ。時代が違ふとはいへ、如是閑の歩いた道を辿るとき、その偉大さがうなずけるのである。（平山記）



在りし日の長谷川如是閑

## ちよつといひ話

浮

世絵師の歌川豊国さんが、この三月に大阪府立桃谷高校定時制を卒業し、近畿大学の法学部（一部）へ入学するという。明治三十六年生まれの九十六歳になる人だが、スゴイことである。

高校進学も四年前のことだから、九十歳を過ぎてからのことで、向学心をかきたてるものは何か――。

世

その気さえあれば、学校はいくらでもあり、教育の機会均等は憲法でも保障されている。しかし、明治年間に生まれ育つた歌川さんは、子供のころから父などに浮世絵を習い、修業のため尋常小学校しか行けなかつた。

伝統文化を後世に残すために「新仮名遣い」を学ぶことが高校進学の動機だった。

# 告 知 板

定時総会の日程が決まりました

去る二月八日(月)に開催された常任幹事会で、平成十一年度の定時総会・懇親会の日程が、次のとおり決定しました。

日時 六月二十六日(土)

午後六時から

会場 板橋区立文化会館

総会の議案等詳細は、常任幹事会及び幹事会を経て、追ってご案内いたします。

## 幹事会の日程決まる

定時総会を控え、幹事会の日程が決まるとお知らせしましたので、お知らせします。

記

日時 五月十四日(金)

午後六時から

会場 板橋区立産文ホール

支部規約改訂委員会(仮称)が発足しました



委員長 栗原 委 員 長

かねてから、支部規約の運用に支障があるとして、一部規約の見直

しが必要とされてきましたが、去る二月八日の常任幹事会で改訂委員会(仮称)の設置が正式に決まり、委員長に栗原三郎常任幹事が選任されました。他の委員は四、五名を目前に委員長が選任し、問題点の抽出・分析をし、改訂案を支部長へ答申。支部長から次回常任幹事会を経て、幹事会へ諮ることになりました。

改訂委員には、次のとおり弁護士を含む法務業務に詳しいメンバーが選任され、目下改訂作業が進められています。

\*

- 委員長 栗原三郎 (常任幹事) 商
- 委員 巨勢典子 (常任幹事) 法
- 委員 平山惟美 (常任幹事) 経
- 委員 若木康夫 (会 員) 法
- 委員 池内権利 (会 員) 法

## カラオケ同好会が

再発足しました

休眠状態だったカラオケ同好会が、去る二月八日の常任幹事会で支部の公認を受け、装いも新たに「白門カラオケ同好会」として再発足しました。

役員は次のとおりです。

\*

- 会長 古澤道夫
- 副会長 若木康夫
- 幹事 千葉寛代 則
- 幹事 大野正浩
- ◎入会をご希望の方は、幹事までお電話下さい。

## ちょっと楽しい話

▼いま中高年の山登りがブームになっている。中高年の定義がよく分からないが、これから書く人たちは若い時から山登りをやっていたベテランばかりだ。

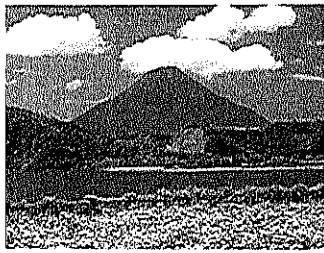
そのベテランの一人で親友のI氏は、彼岸の連休を仲間と鹿

▼開聞岳は、標高が一〇〇〇米に満たない山だが、韓国岳は標高一七〇〇米あり、まさに「雲にそびえる高千穂」で、ともに日本百名山に数えられる。

先祖の墓参りをするでなく、ただ家にゴロゴロしている中高年諸氏には、爪のアカでも飲ませたいが、それにしても元気の源は何か?

▼リーダー格のO弁護士は、確か昨年で還暦のはず。体力の衰えを気力でカバーするというから、見習うべき話である。

山登りの楽しさは、山登りをした者にだけ味わえるもので、頂上を極めた時の喜びもさることながら、下山してからの一杯が格別という。(H記)



■郡から昇格した板橋区

板橋区は、昭和七年に北豊島郡の板橋町、練馬町、志村、上板橋村、赤塚村、中新井村、上練馬村、石神井村に大泉村を統合して現在

地名の由来…③

「板橋」の巻

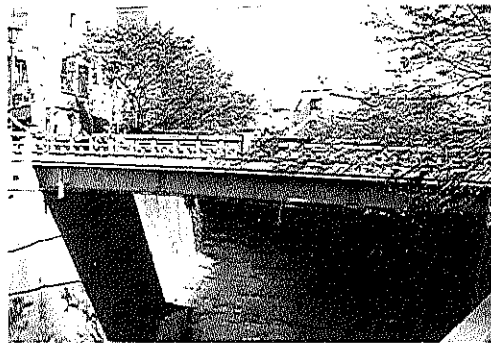
の板橋区域になった。

「板橋」の地名は、石神井川に架かっていた「板の橋」に由来するとされる。その発祥は古く、中世（鎌倉時代）にまでさか上る。

江戸時代には、板橋宿は中山道の宿場として栄えた。

宿場以外の地域は農村地帯で、雑穀類や野菜類を江戸へ供給していたというから農家が多かったことになる。

大正になると、東武東上線が開通して宅地化が進み、常盤台周辺は閑静な住宅地になった。



昭和二十二年八月、東京で二十三番目の区として板橋区から分割されたのが練馬区だから、区制が敷かれた当時は、大変広大な面積だったことになる。

昭和四十年、旧板橋町と名乗った一部が、現在の町（板橋一〜四丁目）になった。

■宿場に旧跡

板橋といえ、品川宿、内藤新宿、千住の宿と並ぶ江戸四宿の一つで、「板橋宿」で知られる。その板橋宿は平尾宿、仲宿、上宿からなっていたが、現在の板橋は平尾宿にあたるという。中山道から少し入った東光寺には、朝鮮の役で秀吉の片腕として総大将を勤めた宇喜多秀家の墓がある。

■「村」から「都市」へ  
板橋は現在、一〜四丁目まであり、区名ともなっているから区の中心と理解していいのだが、「板橋」の由来は、仲宿と上宿の境を流れる石神井川にかかる「板橋」とされているが、具体的な場所は定かでない。いわゆる旧中山道沿いの一带は、加賀藩の下屋敷があった、昔は賑やかだったから多く

の人が橋を渡ったに違いない。  
昭和の初期、まだ北豊島郡といわれた時代は、練馬町と板橋町を除けば、いずこも「村」と表示されていたことを思うと、戦中の陸軍火薬製造所をはじめ、戦後の地場産業の隆盛ぶりには、隔世の感がある。

（中三川記）

編集後記



○：創立十周年の記念誌を発売して、打ち上げをやるうにも年の瀬で機会を逸した我ら一同は、新年早々に「文豪屋敷」（板橋区仲宿）を会場に『白門板橋』の編集会議を兼ねた新年会を開いた。無論、記念誌発刊の打ち上げも兼ね楽しい集いになった。

○：会場の部屋の名が「一茶庵」。かつて三文文士が住んでいたというだけに、大正ロマンを感じさせる雰囲気がある。少し歩くと、地名の由来になった『板橋』も近い。土地家屋調査士を本業にする編集委員が二人もいるから、会議はトントン進む。

○：年一回発行することになった会報だけに、編集長のリーダーシップが問われるが、アルコールを潤滑油にして、今年も頑張りたい。（H記）